

田中勲千代さん経歴（敬称略）

寿都五十話著作者山本竜也氏に依頼したものです

田中勲千代は大正十四年（一九二五年）に寿都で生まれました。両親が北檜山の日昼部（「日昼部」と呼ばれており、勲千代はその四男でした。両親がどうして寿都に来たのかは分かりませんが、道南ではニシンが徐々に獲れなくなっており、新天地を求めて北上してきたのかもありません。父親は寿都で小漁師として働いていました。

寿都尋常高等小学校を卒業した勲千代は函館船渠に就職しました。しかし、昭和二十年（一九四五年）に赤紙を受け取ります。四国で海軍特攻隊の養成所に入り、パラシュートをつかった降下訓練のさなか、着地に失敗し、足に竹が突き刺さりました。「役に立たないヤツだ」と言われて、将校付きの小使いになります。几帳面な性格を気に入られ、怪我が治ったあとも戦地に行くことなく、終戦を迎え、寿都に帰ってきました。

帰還後は漁船の機関士として働いていました

当初は、テレビの電波を拾って流すだけの勲千代でしたが、NHKと民放の一部しか映らないことに不満をもち、みずからチャンネルを一つ増やすことを考えます。昭和五一年（一九七六年）、電波監理局にケーブルテレビ局の開局を申請しました。なかなか許可が下りませんでした。二年後によく受入れられ、昭和五十四年（一九七九年）に正式放送を開始しました。テレビすつつ放送の始まりです。

まだ若かった勲千代は体力に任せて十キロもあるカメラを肩に載せ、人を頼んで、十キロの録画装置と十キロのバッテリーを持ってもらい、毎朝漁港に出掛けました。テレビカメラなどまだ珍しい時代です。「田中さん、タラとってるとこ、うつしてくれねえか」などと声をかけられ、船に乗り、漁業風景を撮影しました。テープは、その日の夜に放送され、自身や知人が出演する様子に町民が大喜びしました。昭和五五年（一九八〇年）には、スタジオを手づくりし、生放送できる体制を整えます。町長選挙や町議会議員選挙の開票速報の生中継が評判を呼びました。昭和五六年（一九八一一年）、勲千代は、HBC（北海道放送）と報道カメラマンの契約を結びます。

が、機械やバイクが好きだった勲千代は、昭和三十年（一九五五年）頃、バイクのパーツを軒先に置いて売りはじめます。昭和三二年（一九五七年）頃には、船のバッテリーを扱うようになり、田中電機商会を立ち上げました。また、昭和二九年（一九五四年）に妻のマツイと結婚し、昭和三十年（一九五五年）に長男の則之、昭和三三年（一九五八年）に次男の宏二、昭和三八年（一九六三年）に三男の好広、昭和四一年（一九六六年）に四男の伸広をもうけました。

昭和三一年（一九五六年）、北海道でテレビ放送が始まります。田中電機でも、テレビを売るようになったのですが、札幌からも室蘭からも山が邪魔をして、電波がうまく入りません。勲千代は、友人二人の手を借り、電波の調査を始めました。三月はじめ頃、電波強度計とアンテナ・発電機・テレビを背負って、雪が積もった寿都の裏山を歩きまわり、映りの良い場所を探しました。結果、受信の良い場所を高台に見つけ、飯やぐらを立て、アンテナをとりつけ、ケーブルを引いて、町民がテレビを覗られるようになりました。その後、受信良好な場所を求めて、アンテナをさらに山の上に移動させています。

珍しい出来事や事件・事故などが寿都や近隣町村で起こるたび、カメラを持って現場に駆けつけるようになりました。昭和六十年（一九八五年）に寿都湾で発生した竜巻は、その発生から発達の過程を捉えて、全国放送されました。また、平成八年（一九九六年）の豊浜トンネル岩盤崩落事故では、報道カメラマンとして古平側出口に一番乗りしました。トンネルに入り込んで収めた崩落映像が、やはり全国放送されています。

大企業でも自治体でもない個人が放送局を作って、映像を流す。撮影も編集も有線の敷設もすべて自前です。北海道では、あとにも先にもこのような人は出ていません。長男の則之、四男の伸広の手を借りながら、勲千代は80歳まで働きつづけました。パーキンソン病を抱えての労働はきついものがありましたが、本人は休もうとはしませんでした。「映像の根性」。勲千代が遺した言葉です。

田中勲千代さん追悼に寄せて 山本竜也

寿都に転勤してきた二〇〇六年、「この町では電波が入らないので、ケーブルテレビを見てい」と同僚に言われました。しかも、独自の放送チャンネル「テレビすつつ放送」まであると、いいいます。夜七時に始まる番組を覗いてみると、地元小学校や商店街の行事ばかり流れており、「旅の人」が興味をもてる内容ではなかったのですが、それでも、寿都を取り上げた中央の番組の再放送やテレビすつつが北海道放送（HBC）に提供したニュースの再放送などに、ついつい引き込まれることもありました。町の行事に参加すると、自分が出演者になることも出てきました。

二〇一三年頃、寿都の歴史をまとめた本を書きたいという構想を抱き、テレビすつつも取り上げたいと現社長の田中則之さんに相談すると、一通りのことは説明してくれましたが、「詳しいことは父に」といいます。パーキンソン病で入院中だけれども、話はできると聞き、洞爺湖畔の病院を訪ねました。

勲千代さんは病室の奥で伏せておられまして、寿都を残すことにこだわる私の先人ともいえます。則之さんによると、テレビすつつには、一九七八年の開局以来撮りためたテープが推定三千本も残されているといえます。偉大な仕事を成し遂げられた勲千代さんに深く敬意を表します。

父との思い出 田中則之（長男）

私が横浜の会社を退職して寿都に帰ってきたときは、まだテレビすつつが出来てまもなくという事もあり土蔵の一角にビデオデッキが一台あるだけでした。それ以降スタジオも建て機材も増えて現在の形になるまで、予算も少ないながら私が設備担当という形になっていました。実際に、うちの父はカメラの細かい調整はあまりせず撮影技術に天性のものがあるのかHBCの方によく褒められていました（お世辞かも知れませんが）。私には、そのような才覚はなく、どうすれば芸術的な映像を撮影できるのかずっと悩んでいました。うちの親子の会話は仕事の関連だけで業務連絡です。有線工事の時も道具を

た。「テレビすつつの昔の話聞かせてもらえませんか」と言うと、横になったまま話し始めました。「あんたはだれだ？」とも問わず、天井を見つめたまま、語るのです。則之さんもよくしゃべる人ですが、勲千代さんの血を引いたのでしょう。有線放送をはじめることになったきっかけから独自放送の開始、HBCとの提携など、こまかく教えてくれました。話がのつてくると、「枕を動かしてくれ」と頼まれました。顔をすこしでも上げたいようです。二時間ほど、ベッドの横でメモをとり続けました。「うちはHBCと兄弟分みたいなもんだからさ。もちろん会社の規模はぜんぜん違うんだけど（笑）。向こうも定期的に挨拶に来てくれて。でも、この病院に入っていることは言っていないんだ。気を遣うでしょ」。その言葉の端々から、放送人としての誇りを感じました。

私が寿都に来た頃には、勲千代さんがカメラを肩にのせて撮影する姿を見かけることがありました。「こんな高齢で大丈夫なのかな？」と感じましたが、現役時代の勲千代さんを見ることのできたのは幸運だったのでしょう。寿都を映像で残すことにこだわった勲千代さんは、文章

取るときも「気が利かないな」と怒鳴られ、「言わなければわからないわ」という怒鳴り合いました。しかしビデオ撮影はカメラとビデオが分離しているので2人3脚じゃないといけません。25年近くはうまく仕事をしていました。テレビ取材が一番嫌な事は撮影先で不幸な事故があったときに関係者に「人の不幸を撮って何が面白いんだ！」と怒られます。「こっちだって好きで来ているんじゃないわ！」と心で叫ぶ。私は褒められて伸びるタイプなので怒られて仕事して何が面白いとずっと思っていました。こんな感じで常に父とは対決意識を持っていました。父と最後の会話をしたのは私が室蘭病院で手術し退院した帰りに洞爺湖温泉に初めて訪れ、寝たきりになった枕元に「臍臓ガンになって手術したんだ」と話したら小さい声で「痛たまねかったか？」と聞かれ「転移がなかったら大丈夫だ」と会話をしたのが最後かもしれせん。もしかしたら私が先に逝くところだったのが順番通りになってよかった？本人はどう思っているか知りませんがこんなこと言えるのも親子でしょう。皆様お許しください。本日はお忙しい中ご参詣くださり、ありがとうございます。